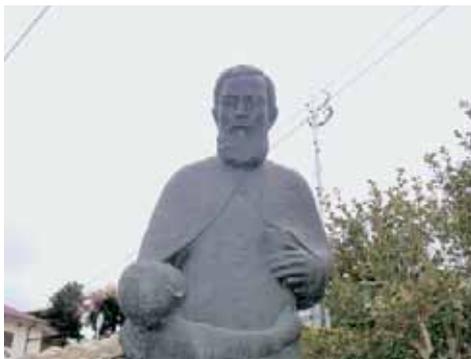


## （その6）<sup>そとめ</sup>外海界限

昨年、長崎県美術館をはじめ、長崎歴史文化博物館、女神大橋が相次いで完成し長崎に新名所が誕生した。こうしたなか、長崎市ではいよいよ「長崎さるく博'06」の本イベントが4月1日から10月29日までの212日間の日程で開催される。

この「長崎誌上さるく」では、これまで鳴滝塾跡、出島、稲佐、西坂～中町、唐人屋敷界限をシリーズでさるいてきたが、今回は、2005年1月に長崎市と合併し、“キリシタンの里”として今、注目を集めている旧外海町、特に黒崎、出津エリアを中心にド・ロ神父とともに生きたキリシタンの人々に思いを馳せながらさるいてみたいと思う。

### ド・ロ神父と長崎・<sup>そとめ</sup>外海



ド・ロ神父の銅像（出津文化村内）

ド・ロ（<sup>マルコ マリ ド・ロ</sup>Marc- Marie de Rotz）神父は1840年3月、フランス北西部、カルバドス県バイユ市ヴォスロール村の貴族階級の家にも生まれた。父の教育方針に従って、幼い頃より農業や鋳業、土木、建築、医学、薬学、印刷技術など幅広い分野の学問を学んだという。

20歳の時に神学の道を志し、宣教師としての勉強を始めた。1865年、同県カン市の聖ジュリアン教会の助任司祭に就任。さらに2年後の1867年にはパリ外国宣教会に所属した。

1868年、ド・ロ神父がプチジャン神父（パリ外国宣教会・長崎教区長司教）とともに長崎に到着したのは28歳の時のことであった。奇しくも、1867年から68年にかけて空前絶後のキリシタン弾圧事件「浦上四番崩れ」（一村総流罪3,414名）が起こっているが、これは単なる偶然というより、浅からぬ因縁というべきかもしれない。

すなわち、1873年に明治政府から出された太政官布告「浦上異宗徒帰籍ノ達」により260年余りにおよぶキリシタン弾圧に終止符が打たれると、大浦天主堂（1865年建立）を拠点に各方面へ巡回伝道を行っていたパリ外国宣教会は、信徒の多い地方には神父を常駐させることとし、この外海地方にはド・ロ神父が任命され、1879年、主任司祭として赴任したのである。

当時の外海地方は、キリシタン大名大村純忠の統治以来、多くの信徒が居住し、古くからキリスト教との関わりが深く、また信仰が盛んな地域であった。外海のキリシタンたちは、徳川幕府による禁教令、弾圧に対しても潜伏し信仰を守り続けた。しかし、耕地に恵まれない土地での生活は、長年にわたる政治的、社会的迫害によって次第に困窮の度合いを深めていった。ド・ロ神父はこうした窮状を知り、物心両面から外海の人々を支え続けた。

その活動は、本来の布教活動はもちろん、平板印刷による印刷・出版事業、原野の開墾をはじめ、農機具や品種の改良など農業、<sup>いわし</sup>鱒漁などの漁業、<sup>しつ</sup>出津教会や大野教会などの教会建築、道路工事や防波堤建設などの土木工事、授産場や保育所などの社会福祉事業、診療所や薬局の設立による医療活動など



1893年建立の大野教会

多岐にわたり、ド・ロ神父は、まさに“奉仕と犠牲の精神”で全てに私財を投げ出し、多大の成果を上げた。その証しともいえる建物が点在する「出津文化村」をはじめ、<sup>おおだいら</sup>大平地区には開墾された農耕地や使用された井戸、農作業小屋跡（市指定史跡）などが現存し、ド・ロ神父の偉大さを静かに物語っている。



ド・ロ神父の墓碑

1914年、ド・ロ神父は、長崎でその74年の生涯を閉じたが、出津教会の裏山にある教会の共同墓地に埋葬され、多くの信徒たちとともに静かに眠っている。“ド・ロさま”と敬慕の情をこめて呼ばれ、その人柄や功績は今なお人々の心に深く刻みこまれており、ド・ロ神父が取り持つ縁は、姉妹都市関係（1978年に旧外海町とヴォスロール村が提携）へと受け継がれている。

外海案内図



### < 黒崎教会 >

最初に訪れたのは、国道202号線沿いに見える赤レンガの美しい聖堂、遠藤周作の小説『沈黙』の舞台ともなった黒崎教会である。

内部に入ると、祭壇が向こう側に小さく見え、広い空間となっている。天井には十文字の装飾が施されており、また、ステンドグラスを通して差し込む光が作り出す神秘的な雰囲気がとても印象的である。

ところで、この教会が完成するまでには長い道のりがあったと聞く。すでに1870年には黒崎地区にも仮聖堂があったが、本格的な教会堂建設の機運がこの地において高まったのは1887年頃と伝えられている。1897年、ド・ロ神父の指導によって敷地の造成が着手され、1899年ようやく工事が完了した。あとは教会堂を建設するばかりとなっていたが、資金面の制約から計画はなかなか進展しなかった。その後、教会堂建設運動の再燃もあって、ド・ロ神父亡き後の1918年に着工し、2年後の1920年に完成した。敬虔な信徒たちは、みんなでレンガや木材などの資材を運び、この間、貧困と闘いながらも芋や野菜などを売って建設資金



マリア像が迎える黒崎教会

を捻出したともいわれており、まさにこの教会は、“信徒たちがレンガを1つ1つ積み上げて築いた、奉仕と犠牲の結晶”というべきものである。

かれまつ  
< 枯松神社 >



キリシタンを祀る枯松神社

黒崎教会から車で5分ほどの山中にあるのが、宣教師サン・ジワン神父（外海キリシタンの信仰を支えた外国人宣教師）を祀る枯松神社（市指定史跡）である。このようにキリシタンを祀った神社は全国的にも珍しく、枯松神社の他にはくわひめ桑姫神社（長崎市湊町）、おたあね大明神（伊豆大島）などが知られている。

1614年に徳川幕府から出された禁教令以降、キリシタンの取締りは次第に厳しさを増していったが、こうした状況にもかかわらず、この黒崎地区のキリシタンたちは、枯松の山頂にあった“おエン岩”と呼ばれるサン・ジワン神父の隠れ家であった岩の前に密かに集まってオラショ（“祈り”）をひたすら唱え、伝承されたといわれている。

現在のほこら祠は、サン・ジワン神父の墓の上に建てられたもので、周囲には、十字架を刻んだ自然石（結晶片岩）の板石を伏せて置いただけの古いキリシタン墓があり、また、祠の手前には「祈りの岩」という大きな岩も残っている。この一帯は“かくれキリシタンの聖地”ともなっており、静寂につつまれた神聖な雰囲気の中で耳を澄ましていると、長く過酷な弾圧と迫害に耐えて祈り続けたキリシタンたちの息遣いが今でも聞こえてきそうである。



雑木林の中にある祈りの岩

しっ  
< 旧出津救助院 >

枯松神社から再び国道202号線に戻り車で約15分、大瀬戸方面に向かったとこ



夕陽が丘そとめ公園より出津文化村を望む

された西欧建築技術の遺産としても極めて貴重なものであり、2003年に敷地内の塀や石垣、石段なども含めて国の重要文化財に指定された。

1879年、外海に赴任したド・ロ神父は、窮状に苦しむ人々を救うため、定期的な収入が得られるよう働く場所を作ること考え、また、この地に産業を根付かせることの必要性を痛感していた。そこで、救助院の建設を計画し、自らの設計、指導により1883年に授産場を、1885年に鰯網工場を設立した。

### 授産場



2階建の旧授産場

ン生地などを発酵させるム口が、また建物東側にはパン焼窯跡が残されている。2階部分は主として修道女の生活場所で、礼拝堂も設けられており、織物工場と

ろにある「出津文化村」内に旧出津救助院がある。救助院は、ド・ロ神父が外海地方の人々の窮状を救うために、私財を投じて創建した授産、福祉施設の総称であり、授産場やマカロニ工場、鰯網工場として使用された建物が現存している。

これらは、明治初期の社会福祉活動の遺産として、また、当時のわが国に導入



出津文化村入口

1883年に建てられた授産場は、救助院の中心的な建物であり、木造および石造、2階建の建物が現存している。1階部分は仕切りがない土間の広い部屋で、作業場として使用されており、パン、マカロニ、そうめんや醤油製造、搾油、染色などが行われた。土間床中央には長く掘り込んだ地下貯蔵庫があり、北西隅にはパン

しても使用された。ここでの生活は貧しく厳しいものであったが、常時30～40名いた修道女たちは生き生き働いていたといわれている。

#### マカロニ工場

救助院の敷地の東端にあるレンガ造、瓦葺の建物が旧マカロニ工場である。内外とも漆喰塗りで、内部は東西2部屋に仕切られており、西側の部屋にはかまどが設けられていた。また、建物に隣接する形で「ド・ロ壁」と呼ばれる石積塀が残されている。



旧マカロニ工場とド・ロ壁

「ド・ロ壁」は、地元の雲母片岩で築いた石壁で、岩の粘着用として当時、広く使用されていたアマカワ（赤土と石炭に糊と切を混ぜてこねたもの）の代わりに、ド・ロ神父の指導によって石炭と砂のみを使用して作られたところに特徴があるといわれている。この画期的な手法は、九州各地の大工や左官たちの間でたちまち広がり、これらの人々によって全国各地に広まっていった。

#### 鰯網工場（現ド・ロ神父記念館）

1885年に建てられた鰯網工場は、後に保育所として使用されていたといわれている。現在は、ド・ロ神父記念館（1968年開館）として利用されており、ド・ロ神父に関する資料が多数展示されている。この中には、1890年頃フランスから取り寄せ、ミサ等に用いられていたといわれる愛用のオルガンをはじめ、遺品のな



旧鰯網工場（現ド・ロ神父記念館）

かにあったといわれる青銅製で方形の大型メダル「出津のプラケット『無原罪の聖母』」（県指定有形文化財）や1877年頃、日本人絵師に布教用に作らせた木版画（宗教版画）のひとつといわれている「木版画筆彩『煉獄の靈魂の救い』」（県指定有形文化財）などが公開されている。

## < 出津教会 >



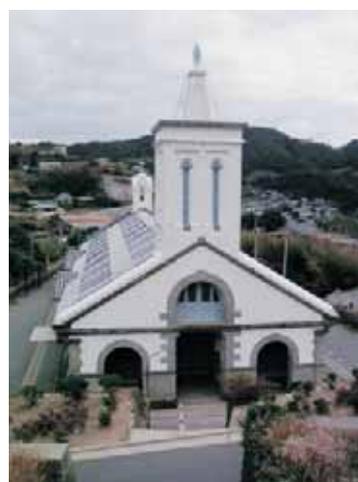
「歴史の道」

旧出津救助院を見学し、出津教会へと向かう。ド・ロ神父も教会と救助院との往来に歩いたといわれる小径は、「歴史の道」と呼ばれ、現在のはのどかな散歩道となっている。徒歩5分ほどの小高い丘の上に白亜の出津教会が建っている。

ド・ロ神父は、赴任直後からこの地に教会の必要性を感じていたそうだが、これが実現したのが、1882年に私財を投じて建設された出津教会である。1891年と1909年には一部が増築され、現在の教会の姿に整えられたが、建設から増築まで一貫してド・

ロ神父による設計、施工によるもので、フランスから持ち込まれた技法が随所にみられるそうである。なお、1972年には、長崎県から有形文化財に指定された。

この教会は、屋根に装飾塔のほかに鐘塔を設けた珍しい外観で、外壁はレンガ造、玄関は石造、内部は木造で、三廊式漆喰塗り平天井となっている。もしかすると、フランス人のド・ロ神父としては、大浦天主堂のようなゴシック様式の建物を思い描いていたのかもしれないが、海岸に面した強風を受けやすい立地条件に配慮して、低く堅牢な造りの建物にされたといわれている。



白亜の美しい出津教会

## そとめ < 外海のグリーン・ツーリズム >

最後に、歴史や文化と直接関係はないが、旧外海町が誇る豊かな自然に目を向けてみたい。

おおなか お  
大中尾地区では、1999年に日本の棚田百選に選ばれたことをきっかけに、2000年度より「都市農村交流対策事業（グリーン・ツーリズム）」に取り組んでおり、稲刈り体験等の受入を行っている。都会の人々が農村に滞在し余暇を過ごす“スローライフ”が人気だが、2005年には「外海ツーリズム協議会」が発足し、同会

による「田舎体験ツアー」などが開催されている。農作業をはじめ、パン作りや炭焼きなどが体験できるとあって、なかなか好評のようである。

また、外海の恵まれた自然景観を保ちながら子供から大人まで自然を体験できる環境教育の場を整備する事業として進められてきた「エコ・パークそとめ・黒崎永田湿地自然公園」が、2003年に農業の機械化と減反政策によって遊休・荒廃地化した約10haの水田跡地に開園している。この公園には、絶滅に瀕した生物も数多く見られ、特に、日本有数のトンボの生息地として高い評価を受けている。

たまには都市部の喧騒を離れ、こうした自然を満喫しながら、のんびり休日を過してみられてはいかがだろうか。



黒崎永田湿地自然公園

これまでみてきたように、外海界隈には歴史、文化、自然が3拍子そろっており、隠れた魅力がいっぱいのコースである。

また、外海といえば、“<sup>すもうなだ</sup>角力灘に沈む美しい夕陽”が有名であり、特に、国道沿いの断崖の岬の上に立つ「いこいの広場・夕陽が丘そとめ公園」は、夕陽を見る絶好のスポットとなっている。遠藤氏の遺品約3万点と蔵書約7,000点を収蔵する「遠藤周作文学館」(2000年開館)に続いて、本年4月、この公園内に道の駅



遠藤周作文学館より角力灘を望む

「夕陽が丘そとめ」がオープンする予定で、地元の新鮮な農水産物のほか、特産のド・ロさまそうめんなども購入できるようになるので、楽しみがまたひとつ増えることになる。

まずは手始めに、市民ガイドの案内による“通さるく”外海コースに参加してみられることをお勧めしたい。

協力：長崎さるく博 06推進委員会事務局（長崎市観光部）

（石橋 隆幸）

「出津文化村」 長崎駅から長崎バス板の浦行き連絡桜の里ターミナル行きで50分、終点交通アクセス 下車。西海交通バス板の浦行きに乗り換え28分、出津文化村下車。